

宇宙戦艦ひよひよ

皇女の復讐

SpaceBattleShipPIYOPIYO

2011年 盛留真悟作品

未完成 (C) Pap. U. C. Z 2007-2011

目次

序「木星連邦の興亡」	1
生命ある全てに捧ぐ	4
第一章『ウニ・ククドゥール』	
第一話「たまごとり」	7
第二話「君島さん号泣事件」	9
第三話「ウニとフランソワ」	12
第四話「イオ」	15
第五話「宇宙戦艦びよびよ」	19
第二章『フランソワ・ククドゥール』	
第一話『二人の皇女』	25

序「木星連邦の興亡」

人類の功績の中でもっとも傲慢で、もっとも新しい偉業はなんといっても木星改造であろう。

人類が住める星へと惑星改造するという、テラフォーミングが行われなまま火星は発展。

火星への移住を足踏みしていた多くの地球人は、結局地球の寿命ぎりぎりまで残り、木星に注目した。

あんなガスばかりで出来ている大容量の惑星は、人類が住んでしまっただけでは大掛かりな開拓ができないのだ。火星の協力も得ながらという大事業であったが、大いなる視点から見れば、まるで木星を調理しているかのような行為だったに違いない。

当初の作業が「質量を変えずに、組成を変える」というまるで化学の実験のようなことを、地球の130倍もの規模でやってみたのである。これにより、木星には空と大地の区別がついた。人類はついに新天地を作り出したのである。

木星改造はおそろべき速度で成しえた。

地球の各国家・民族は木星という新たなキャンバスに描きなおされた。そこには多民族国家、民族国家、宗教国家、都市国家など多彩な国々を生んだ。内部紛争の起こらぬよう、繊細に線引きされたこの国々は、建国と同時に木星連邦という巨大な組織を作った。木星上のすべての国家を含んだ木星連邦は人類のほとんどを内包したのだ。

人類全てをまとめあげるかのようなその自信と誇りは新たな火種の萌芽を孕んでいた。

火星の国家は、この木星連邦には加わらなかったのである。

火星は南部の王国連合と北部の共和国連邦があった。前者は先行した火星自治連合の流れを汲む組織で、後者は後続の移民者からなる。木星連邦はこの火星北部を取り入れようとしたが、頑なに拒まれた。

理由はさほど難しくなかった。共和国はすべて立憲君主制で、それぞれの国が南部のさまざまな王国の王の名の下に建国されていたのだ。運営こそは議会制民主主義で行われたが、高等行政は南部にゆだねられ、王国の庇護で育まれていたのである。王国はみな使命感が強く、一国一国が火星の省庁のように振舞った。火星という過酷な開拓地は、ひとつの省庁をひとつの王国へと進化させた。その複雑な歴史はまた別で語るとする。

強大な組織を起こした自負と火星へと旅立てなかったコンプレックスは、木星人類とくに木星連邦トップに必要以上のストレスを与えた。これが木星の火星敵視の本質である。

木星連邦の中心で反火星を声高に叫んでいたのはかつての超大国が再編したパシフィック共和国である。

この強国は火星の国防組織に対抗すべく、主に自国の軍からなる木星連邦軍を率いた。軍の中心足りえたパシフィック共和国とその周辺国家は、木星連邦の中央政府を意味するようになる。この経緯は火星の歴史と妙に符合するが、この時代、強大な連邦は国家それぞれが行政の各部門を担当するものなのだ。

肥大化する木星は、火星に対する威嚇としか思えない壮大な宇宙軍を作った。その圧倒的な兵力には専守防衛の精神はなく、誰の目にも火星侵攻に備えているとしか思えなかった。火星もその動きは察しており、質実剛健な気質も相まって、対抗意識を燃やした。

その火種は意外な角度でなりをひそめた。

木星の巨大国家であるチュラン共和国とその周辺国家、また大印度というパシフィックに匹敵する大国が火星侵攻に反対する大義を持って独立したのである。これをきっかけに一兩日中に木星の過半数の国家が連邦から独立した。

独立相次ぐ木星は大掛かりな再編となった。チュラン、大印度、ブッチなどの民族国家やその周辺の企業国家は木星諸国連合を結成。木星連邦はその独立を認めなかったため

に、パシフィックなどの超大国は中央政府を名乗った。しかし、木星諸国連合を制圧できるだけの軍事力が間に合わなかったために、独立は黙認のような形になった。ここに木星の2大勢力が誕生する。

中央政府と諸国連合は牽制し合いながらも、各々の立ち位置を模索していた。諸国連合は火星と国交を続け、中央政府は火星と諸国連合に対し常に強気な態度をとり続けていた。分断してしまった木星がそれでもうまくまわったのは、ロンやカリストといった経済地域系独立国家が両陣営のどちらともうまく立ち回っていたからである。市場経済だけは単純に分断できなかったのだ。

それでも、政治的分断は少しずつ平和を奪っていった。仙道真扶菜によれば「宇宙を飛び交う時代になっても今と変わらぬ火種が陰を落としていた。平和そうな時代」とのことである。

そんな中、木星の衛星イオでは星の半分で世田谷共和国が小峰王国として再建された。もう半分で、ククドゥール食品が王国を名乗った。

生命ある全てに捧ぐ



第一章 『ユニ・ククドゥール』

第一話「たまごとり」

＼——ククドゥール食品、小峰重工を買収

この経済ニュースは、偉大なる木星でさして大きなインパクトをもたらさなかった。この歴史的瞬間を、中央政府は関心すら持たなかった。だが、こう書き換えればことは重大だったのだと、多少の人は気づくだろう。

＼——コミネ王国、ククドゥール王国の傘下に

大きすぎる中小企業「ククドゥール食品」はわずかの期間に衛星イオの企業を買収し、一大グループを築いた。これは企業国家が企業国家を吸収することであり、絶対王政の抱えるグループはすなわち「帝国」であった。衛星イオの天下を統一したククドゥールは晴れて「ククドゥール帝国」となったのだ。

おだやかな風、温かな気候。どっこまでもまったりとしたこの国土。衛星イオは温泉が湧き出るほどあたたかかった。

衛星イオの中でもほぼ一日中、太陽のあたる北極周辺にはそれはそれは広大な牧場があった。

日本で言えば九州くらいある巨大な自然牧場に、多くの鶏が放牧されていた。それはククドゥールが管理する農園であり、よくよく調べれば、雄鶏限定エリア、雌鶏限定エリア、家族エリアに分かれていることがわかるだろう。そのほとんどは雌鶏エリアで、ククドゥールは昔から、卵を集めて売るのが主な仕事だった。

臣民すなわちククドゥール社員は、代々この卵取りの仕事が続けており、早朝から卵を拾いに行くことは国民の義務だったのである。これは旧コミネ王国の人々を驚かせたが、感心させもした。

国民の義務は王族の義務でもある。皇帝の娘フランソワ・ククドゥールは最近まで、自分を含め世界中のすべての人が毎朝卵をとりにいくのだと思っていた。

コミネ王国にいた人々が朝卵をとらないことに最初は怒りもしたが、どうやら、この義務が単なる家業の一環であることによりやく気づいたのである。

この日もフランソワは朝5時に起きて卵を集め、8時には多くの卵を回収場所に収めていた。

回収のおばちゃんは「さすが達人の姪だね」と褒めてくれる。なんとこのおばちゃんはフランソワと同じだけの卵を先に集めてみんなを待つのだ。フランソワはまだ若く、回収のおばちゃんほど卵を集められないのだが、こんな風に評価されると嬉しかった。自分は国のために役立っている。その誇りは王族に必要なものだった。

皇帝の娘という立場で、とても参考になる人がいた。従姉のウニ・ククドゥールである。

先代国王ククドゥールツウルの娘がウニである。先代の弟で現国王（兼皇帝）ククドゥールツウルはフランソワの父である。外務をウニが、内務を皇帝が治めているのだ。フランソワはウニを尊敬していた。優しく賢くて、なにより知恵があった。ただ、天然ぼけの多い国内で、特に天然ぼけが多いといわれる王族内で、ウニの天然っぷりは並ではなかった。きっと頭がよすぎるのだろう。ウニの外務政策は王族以外には内容を知らせていない。一見奇想天外な作戦でも、きっとウニならば、予想を超える成果をのこすことだろう。

ウニの決意の固さを、フランソワは身が震えそうなほど知っている。先代をあそこまで追い詰めた、中央政府や木星の諸事情に、ウニは平和的復讐を実行しつつある。中小企業が数々の超大国に、悪戯としか思えない戦争をしかけるのである。

何が先代を苦しめたのか、それは独立直後のあの事件からはじまる。

第二話 「君島さん号泣事件」

独立直後、ククドゥールは王国を名乗り、木星諸国連合に加盟した。社員全員参加の絶対王政だ。食糧自給率4万パーセント。食品会社が独立したのだ。そんな数字にもなろう。中小企業が始めた手作りの王国である。みんな仲が良くて、あたたかく、いい国だった。王族の冠などもすべておばちゃんたちの手作りだ。

王国は順調に思えた。だが、あの事件が起きてしまった。

本社工場仮設営業所こと王国執務室にニュースが走った。

「君島さんが泣いて帰ってきた！！」

君島さんはみんなが大好きな、笑顔の優しい営業担当、大人のお姉さんである。あの君島さんを泣かすなんてどいつだ！ 温厚なククドゥール人でも、これは腹が立った。ヒドイ。本社工場のみんなが営業所に詰め寄った。キツイ。

君島さんの説明によれば、パシフィックをはじめとする中央政府（いわゆる木星連邦居残り組み）諸国が直接取引をしてくれなくなったというのだ。ククドゥールの輸出先の大半は中央政府である。人口がかなり多いわりに、あんな食糧自給率の低い国はどうやって食べていくのだ？ 第一、新鮮な卵はククドゥールでしかとれない。政治の都合で、卵を買わないなんて、どういうつもりだ？

「中央政府がもう卵を買ってくれない」

君島さんはそれはもう号泣で、みんなももらい泣きした。中には事情もよくわからないけれど泣けてきたという人もいる。これが「君島さん号泣事件」こと「君島さんの泣きにつられて本社号泣事件」である。

先代の対応はきわめて早かった。中立といわれるロンやカリストを通して卸すことにしたのである。直売でがんばってきたが、さすがに妥協するしかなかった。

これは地味に痛手を負う形になる。

なぜ今まで直売にこだわってきたのか、創業千年の企業は忘れてしまっていた。いや、こんな規模の直売範囲なんて誰にも想像できたわけではない。ともかく、直売こそが一番だったのだ。

ククドゥールの朝は早く、昼に国民みんなでごはんを食べたら退社時間である。午後は（何に使うのかはわからないが）資格試験の勉強やカルチャースクールなどに行き、自分の時間を充実させ、夜は早く寝るのが一般的なククドゥール人の生活である。

ところが、ロン経由やカリスト経由の卵は到着がなかなか確認できず、ついにお昼を大きく過ぎる残業が発生することになった。残業は国民全体の責任。みんなの退社時間はどんどん遅くなっていった。

生活のリズムが狂ってしまった国民のストレスはすぐに爆発した。のどかな国民性のわりに気が短かったのである。ククドゥール人の怒る姿は誰がどうみても全然こわくないが、その「ナガイ」ことに対するいらいらは見ていてかわいそうになるはずだ。

困った先代は隣国のコミネ王国（小峰重工）を急遽買収し、生産管理などのノウハウを手に入れた。

早出作戦、ライン再構築など矢継ぎ早に手を打ったが、最大3時間の短縮にしかならず、結局1時間の残業が続いた。これについての説明を朝礼で繰り返したが、これはナガイ！として、より国民を疲れさせた。

先代の最後の手は退任だった。後任を弟に託し、自らは「卵取りの達人」に戻り、出荷速度を早めるしかなかったのだ。国王が取れば百人力。・・・だが、たりない卵はうん万倍だ。先代は、無理をして、あっという間に体を壊してしまった。

先代の体を気遣った現国王は、中央政府への輸出を当面加工食品のみにとどめ、生卵の取引については当面休止となった。

フランソワは何もできないでいる自分を責め、父に詰め寄った。国王は、フランソワにいくつかの会社を継がせた。そして「ウニを手助けしろ」とだけ、勅命を与えた。コミ

ネ王国はウニが国王、フランソワが副王となる。

翌日。クドゥールホールディングスはクドゥール帝国を樹立。傘下の会社（王国）を巻き込んだの大仕事だったが独立・合併・分裂の多い木星で、大きなニュースにはならなかった。

だが、これはウニの思惑通りとなる。

第三話 「ウニとフランソワ」

ウニは天才である。天然ボケにもかかわらず、想像を絶する戦略を用意していた。

「生命を一切奪わない軍隊」の開発を命じたのだ。

目的は謎であっても、絶対王政であるからには、作らねばならない。

ククドール王国（帝国本体）バイオ総合研究部とコミネ王国宇宙造船部などによる開発はウニを中心に瞬く間にプロジェクトが進行した。衛星イオの総力を結集した、とんでもない計画である。

あの日、フランソワはウニに呼ばれ、とある湖にやってきた。

二人で船に乗った。ウニが操舵すると言い張り、数分。なかなか出発しないので変だなと思ったら、ウニは船がこげなかったのである。フランソワは苦笑しながら船を漕いであげた。

二人は小船に乗って湖の中心へと向かった。

ちょうど真ん中あたりにつくと、ウニは神妙な面持ちで語った。

「これより私は艦隊を率いて、木星へ向かいます。国の一切と、お父様と皇帝陛下は任せましたよ」

「私はまだ若く、なにをすればよいのかわかりません」

「いつもどおりで構いませんよ。国民のために生きるのです。国の役に立てばみんなが助けてくれます」

「ウニ様」

「貴女には見せてあげましょう。歴史の1ページを」

ウニが視線を遠くに移すとフランソワもそれにならった。視線の彼方には、湖に流れ込む川がある。山から直接流れ込むせせらぎだ。あんなに、あんなにも浅い川なのに、なにか大きめのものが、どんぶらっこっこ、どんぶらっここと流れてくる。卵の形をした・・・なんだろう？ 脱出ポッドのようななにかが、湖に流れてきた。静かに船のそばまでたまごは流れ着いてきた。

「ウニ様。これは」

「これはびよです。」

「びよ？」

「生命ある全てに捧げる、私なりの挑戦です。」

「言っている意味がよくわかりません」

「だからー。これで、木星をね。ふふふふふ。」

「え、ちょ。」

「これよりクドゥール帝国コミネ王国国王ウニは帝国軍びよ艦隊の提督として任務に就きます。国をよろしく願います。副王」

「ウニ様！！」

たまごはぽっかりと開いた。ウニはざざっと乗り込んだ。フランソワはウニが飛んだおかげで揺れる小船から動けなかった。

「すぐに連絡します。放送局でおまちなさい。あと、すぐに岸に戻って」

フランソワはクドゥールネットワークスの社長である。会社にいる、と。

たまごのふたが閉まり、ゆっくりと沈んでいく。沈んでるけどどうしようと思ったが、岸に戻れとの指示を守った。静かな湖。しかし、変な存在感がある気がする。少なくとも従姉と一緒に沈んでいる。

湖畔で、湖を見渡した。船の痕を消すかのように、中央から地味に波紋が広がっている。・・・それは次第に激しくなっていく。急に水面がくぼんだかと思うと、巨大な

何かが飛び出した。

「びーよ！ びーよ！」

ひよこの鳴き声とともに、家ぐらいの大きさのひよこ・・・いや、ひよこの形をした宇宙船？ が飛び出した。これが・・・びよ？

湖上空に静止したのち、真上を向いた。びよは低い低いイオの空を、全速力で突き抜けていった。

これがびよの出港である。

第四話 「イオ」

フランソワが放送局に戻ると、おやっさんがいた。おやっさんとは、コミネ王国の王室顧問で小峰重工先々代社長である。このプロジェクトに見え隠れする伝説の職人だ。作業服の胸ポケットには新しい名札があった。いや、新しい名札はもっていないので、名札の右上に新しいマークのシールが貼られていた。

おやっさんに挨拶をすませると、編成局に促された。現場は初めてだ。

スタッフがみな得意げな顔をしている。

たくさんのモニタがあるこの編成局。その画面のほとんどに広大な青い星、木星が映っている。まるで間違い探しのゲームのように、少しずつ違う角度からの木星が映っていた。フランソワは事態を理解した。

木星をとりまくすべての情報をここに集めている。ここで国の指揮を執りながら、ウニのサポートをしろ、と。

「私は誰に相談しながら指揮を執ればよい？」

「恐れながら申し上げます」

「おやっさん！」

「あなたは副王、誰に助言を求めてもよく。ここはだれからも助言が届く場所。」

「はい」

「命令をお出しになればよい。」

「わかりました。」

「では、がんばってください」

「ありがとうございます。」

身が引き締まった。フランソワは思うままに指揮を執ることにした。

「コミネ王国副王フランソワである。本作戦の全容を誰か私に教えなさい」

メイン画面のひとつが切り替わった。そこにはカバンを持った白衣の女がいた。照明を暗くしているのか、顔はよく見えない。だが、大きく目立つ眼鏡をしていることだけはわかった。正直、賢そうだ。

「ククドゥール帝国軍技術顧問の SAYURI といいます。」

「SAYURI、私はフランソワ。貴女が全て答えてくれるのか？」

「びよ作戦の概要と作戦における副王の役割をお知らせします」

「ありがとう。」

SAYURI を名乗る女は別の画面を使った。

「びよ作戦の概要。帝国軍びよ艦隊により、木星圏での制宙権を獲得します。」

「・・・侵略？」

「そのとおりです。」

「わが国が侵略？」

「ええ、侵略以上のものです」

「おだやかなククドゥールがそんな」

「おだやかなククドゥールにしかできない侵略もある。それが本作戦の肝です。」

「肝？」

「ひとつ、この奇襲作戦で死者はでません。ふたつ、政治目的の軍事活動ではない」

「おっしゃる意味がわかりません」

「なにがわからないのですか？」

「侵略なのに人が死なない。戦争なのに政治目的ではない」

「そうですね。ぴよ艦隊の特徴と本当の目的を教えましょう」

「ジュニアこっこ級宇宙用戦艦、通称『宇宙戦艦ぴよぴよ』について伝えねばなりません。提督はすでに第一段階の作戦に入られましたよ。」

画面にはウニの乗ったあの、ひよこのような船が岩石を食べながら大きくなっていく映像が映っていた。湖から飛び立ったときより、はるかに大きい。

「あれが、宇宙戦艦？」

「ぴよぴよです」

「脱出ポッド型のたまごからスタートし、孵化して宇宙船ぴよになり、岩石や宇宙デブリを食べながら成長します。」

「湖で見たあれ」

「そうです。あれが第一世代型ぴよです。現在、ウニ提督の乗ったぴよはさらにさまざまなものを食べて、徐々に宇宙戦艦ぴよぴよになってきています。」

「宇宙戦艦に成長・・・するの？ 物騒じゃない」

「宇宙戦艦ぴよぴよは相手を殺さずに食べることができます。必要ならば人員はクルーにし、不必要ならば排出します。」

「ひよこ・・・なの？」

「ええ。最終的にはこっこ級宇宙用母艦になります。」

「ぼ、母艦？」

「ウニ提督の乗っているぴよぴよは第一段階の作戦として、まず大きくなり、各ポイントに卵を産みつけます。」

「その卵もぴよぴよになるの？」

「そのとおりです。その卵達が育った状態からが第二段階。第二世代型ぴよを率いて木星連邦軍、並びに諸国連合軍を一網打尽にします。」

「ウニ様がそんなことを」

「ウニ提督は天才です。政治的支配に偽装したちょっとしたいたずらといっても差し支えないかと。」

「いたずらか」

「世界の命運はあの一羽のひよこにかかっています」

SAYURI がどんな人間なのかはわからないが、冗談のわかるひとなんだとフランソワは感じた。おだやかな気質のククドールの恐るべき一撃は、なんと敵艦をたべるひよこだった。ウニの企てた復讐はまさしく木星相手のいたずらだったのだ。

湖でウニを見送った「あの日」からたった一日。フランソワは進化を目の当たりをしていた。

第五話 「宇宙戦艦びよびよ」

人類の歴史上、宇宙戦艦びよびよは兵器に分類される。

戦闘機を始めとする兵器群はレーダーに表示され、その動向はレーダーに映っている内容こそを結果としている。びよびよの食べるという行為は、レーダーから表示を消すことを示す。すなわち、撃墜したことを意味してしまうのだ。

木星時代の最先端科学力とウニの独創性があるって初めて成立する、人類史上最も稀な不殺兵器である。この運用により、戦略上擬似的に勝利することができる。目にした者にしかわからない、そのふざけた兵器はひよこの成長をモチーフに自己更新されていく。脱出ポッドから宇宙船、宇宙戦艦、そして宇宙母艦へと。その先はウニや一部の技術者しか知らない。知らせるよりも、見たほうがはやいのだ。

クドゥールネットワークスの社屋は今、クドゥール帝国軍通信拠点として機能している。フランソワが作戦全体の後衛を一任されていた。

ウニの乗った宇宙船びよは木星の衛星軌道をぐるぐると回っている。SAYURIの説明によれば、レーダーに映らないぎりぎりのところを上手に移動しているらしい。その行動の意味するところは操縦に慣れることである。岩石などを食べ、少しずつ大きくなっている。

「びーよびーよびーよ」

たった今、びよが鳴いた。

びよの中では時折、警報が鳴る。「びーよびーよびーよ」と警戒音のように鳴くのだ。ウニは判断する。お腹が空いたのか、いらぬ材料が増えたのか、それとも遊んでほしいのか、それ以外なのか。今のところは警報が同じであり、その判断には常に情報が足りなかった。

ところが、そこでひとつひとつ尋ねていくことで、びよはコミュニケーションを覚えていくという効果を狙っていた。聞こえ方はどうやら全く同じのようなのだが、感じ取れ

る雰囲気は異なるらしい。SAYURI はびよの精神の波形を類型化するため、逐一データをモニタし、分析している。

ウニによれば、どうやら今回は「お腹が空いた」らしい。SAYURI はそれを記録した。ウニは周囲から手ごろな餌を探した。ここは大印度の上宙（上空よりさらに上）である。探している間にもさらなる警報が鳴る。

「びーよびーよびーよ」

何度も催促することはよくあるが、気をつけて様子を伺った。

すると、宇宙用哨戒機が近くを巡回していることに気づいた。

どうやらあちらはまだこちらの存在に気づいていないらしい。だが、びよはすでに宇宙用哨戒機をロックオンしている。

人の乗った宇宙船を食べて良いものかどうかはすでに決まっている。びよは人を傷つけずに食べるのだから、問題はない。今、問題となるのは、このタイミングでこの宙域の哨戒機が消えた場合、逃げ切ることができるかどうかである。もし、この哨戒機を食べたなら、すぐに母艦らしき宇宙用巡洋艦あたりが追ってくるだろう。正面から食べるのは結構難しいものだし、情報はすぐに上っていく。

ウニはひらめいた。この哨戒機の所属する艦だけを食べてしまおう。食べてさえしまえばその力は手に入る。哨戒機では捉えられないくらいの運動性でこの宙域を離れよう。

びよの初陣である。

哨戒機を食べようとするびよを我慢させながら、ウニは母艦を探した。こちらは漂う、小さな家ほどの宇宙船。推力は独特で、ジェットなどの熱は宇宙とほとんど変わらないので、気づかれる危険は少ない。向こうは・・・いた。それなりに大きな戦艦。今のびよが口にできる限界の大きさだ。

「びーよびーよびーよ」

ウニは察した。お腹がすいているくせにこの子はおむつ廃棄を望んでいる。ぴよにおけるおむつとは余剰原料の廃棄である。取り替える必要はないが、はずしていいタイミングは指示してあげなければならない。せっかくなら、抜群のタイミングで出してあげよう。戦艦までもうちょっと。あ、思いついた。その瞬間、ぴよはきちんと宇宙戦艦をロックオンした。いける！

「今だ！ 食べてよし！」

今までの様子からは想像できない速度で宇宙戦艦に迫るぴよ。焦ったのか、宇宙戦艦は反撃が間に合っていない。まばらな弾幕はぴよにかすりもしない。「たべてよし」を実行するぴよは相手を食べる気まんまんである。だが、まだもう少しの距離をつめなければならない。主砲の照準がぴよを捕らえた。来る！

「おむつよし！！！」

砲撃の瞬間にぴよはおむつを発射。一瞬前までぴよのいた位置にはおむつがあり、ぴよはおむつを発射した勢いで軌道を変える。おむつは主砲の餌食となった。次の瞬間、ぴよの口は宇宙戦艦を飲み込んだ。

かぶ。

ぴよの勝利である。宣戦布告なき、一方的軍事行動。木星のどこか国の宇宙戦艦が消えた。

戦果とともにたくさんの栄養を得て成長したぴよは、晴れて宇宙戦艦ぴよぴよとなった。

第二章 『フランソワ・ククドゥール』

第一話 『二人の皇女』

宙を舞うひよこの征く先は、生命の進化のようなものである。

ククドゥール皇帝ククドゥットゥル・ククドゥールの娘、フランソワ・ククドゥールは自らが社長を務めるククドゥールネットワークス社のスタジオで言葉を探していた。この偉大なる復讐を後世において意義深くするのは、今ここにいる自分の言葉であろう。温厚で平和を好むククドゥールは涙の果てに、王国から帝国へと拡大し、全世界への大いなる復讐に乗り出していた。生命を奪わない侵略とはよくいったもので、侵略にほかならないからこそなんと悪い冗談なのだろう。この作戦の行く末を何度検証しても、ククドゥールの意図以上の結果が残る。

木星圏すべての制宙権を手にし、流通ルートを確立するまでが作戦なのであるが、結果としてぴよぴよは圧倒的な数となり、ぴよぴよ以外の宇宙航行は難しくなる。宇宙母艦としての役割を終えたこっちは一大リサイクルプラントとなるので、農場兼居住区即ちククドゥール領土にもなるだろう。

それはぴよぴよありきの世界であり、人類どころか生物界にとっても新たな環境となる。生命は進化する。生き物のように振舞うぴよぴよとともに。

フランソワ・ククドゥールの考え方は王族のわりに常識的である。天然ボケが多いとされるククドゥール人ではとりわけ王族の天然ボケが激しい。その最たるものは前国王がククドゥールットゥルなのに対し、その弟である現国王（皇帝）がククドゥットゥルという非常にまぎらわしい名前でもかりとおるあたりに顕著であろう。当然天然ボケのほとんどないフランソワは幼い頃からツッコミの立場を余儀なくされた。

ククドゥール人の行動パターンに疑問を持っていたのは国内で恐らくフランソワだけだったであろう。のちに小峰王国が併合され、初めてフランソワは自身ではなく自国が独特なのだと思い知った。

ククドゥール人の特徴、それは温厚なわりに気が短いことである。いろんなことに寛容ではあるが、我慢できないことについては本当に我慢しない。はた目からみてわかりにくいのが、そのキレっぷりは尋常ではないようで、過激な決断をする。今回の作戦がいい例だ。その指揮を執っているウニはある意味ククドゥールとしては最も極端な性格なのである。

ウニの天然ボケに匹敵するだけの常識人であるフランソワには、どうしてもつっこみたいことがあった。

「なぜ、わざわざひよこなんですか！」

帝国軍の通信部門ほとんどすべてが聞いていたであろう、この叫びは、軍人達を大いに沸かせた。

「宙を舞うひよこ」のくだりに自ら疑問をもったのである。

「みなさんも何フツーに受け入れてるんですか！」

「それは私がこたえよう」

「ウニ様」

岩石群に潜みながら進んでいるはずのウニ提督だ。ようやくつながった通信が雑談である。

「ひよこは祖国の誇りです」

「祖国？」

「なんちって」

「いつの時代の人ですか」

「うに。」

「なんでひよこが祖国の誇りなんですか？」

「わが国が鶏の放牧による農業大国なのは知っていますね。」

「はい。」

21世紀に工場型生産農場というのが台頭したが、ククドゥールの前身にあたる養鶏場は強く反発した。工場型が成熟するころになると、世界の養鶏場は二極化した。安価な卵とプレミアム卵の生産である。その棲み分けは地球最後の頃まで続いたが、木星移住で差が出た。なんと、農家の貯蓄に圧倒的な差が出来ていたのである。

『家畜はいつか自分達が食されることを知っている。ならば、その生涯のほとんどを放牧で生かしたい』

ククドゥールの先人はそう考え、稀に見る広大な放牧農場を続けた。その結果、ククドゥールは衛星イオの半分を農が場にするほどに発展した。それは、より自然に近い卵こそが人類に有益であることの証明だった。

「ゆえに、ひよこは祖国の誇りなのです」

人類すべてが卵取りのために早起きするのだと、先日まで思っていたフランソワには驚きだったが、このように歴史の大河を鑑みると、なにか熱いものがこみあげてくる。前国王や父やウニがなにを守ろうとしているのか、やっとわかってきた気がする。

(この先は公演用脚本につながっています。6羽が揃い次第、脚本と並行した続きが発表されます)

宇宙戦艦びびよ ～皇女の復讐～

著 盛留 真悟

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
